

儂智高の語り方

——中越国境少数民族の「英雄」と国家——

伊 藤 正 子

はじめに

多民族国家における国民統合の課題においては、現在における法制度や教育といった具体的な少数民族政策を通じて、少数民族に国民意識を持たせて国民のなかに包含していくだけでなく、少数民族の歴史的な「英雄」やできごとをいかに自国史のなかに組み込んで、通時的にも少数民族を包摂していく（包摂してきたように思わせる）ことが、同様に重要となっている。本稿では、この「英雄」の例として、11世紀に中越国境地帯に独自の王国を建てた儂智高を取り上げ、中越両国が自国史のなかに儂智高をどのように位置づけようとしているかについて検討する。

中越国境に近いベトナム東北部は、石灰岩の岩山のあいだに水田が点在する山間部であり、タイ系民族タイー（Tay）族とヌン（Nung）族の生活空間である。そして国境を挟んで中国側には広西壮族自治区が位置し、タイー族・ヌン族と同系民族とされる壮（チワン）族が多く居住している。タイー族、ヌン族、壮族は合わせて1800万人ほどの人口をもち、一つの国民国家を主張しても不思議ではないほどの規模である。しかし、現存の国家から分離を企図するような動きは国境をはさんだ双方で今に至るも見られず、かれらは国民として問題なく統合された少数民族として、それぞれの国家から位置づけられている。そして歴史上も、タイー族・ヌン族・壮族の祖先にあたる人々（タイ系現地民）が

長期にわたって強力な王朝国家を築いたことはなかった。(本稿では近代における民族概念がまだ生じていない時代のタイ族、ヌン族、壮族の祖先にあたる人々を指す用語として、「タイ系現地民」を用いるが、個別に触れる場合は“タイ族”“壮族”など“ ”を付けて表す⁽¹⁾。)

しかし唯一の例外が、儂智高の「王国」である。それまで中越両王朝の勢力範囲は明確になっておらず、儂家は中国に服属したりベトナムに朝貢したりしていた。しかしタイ系現地民と考えられる儂智高はごく短期間ではあるものの、両王朝の権力の狭間であった地域に、独自の「王国」をつくった。そしてベトナム李朝と厳しく敵対し、宋朝にも何度も服属を請いながら許されなかったため宋とも戦い、結局雲南に敗走したとされる⁽²⁾。

儂智高に関しては、漢籍による歴史研究の蓄積があり、彼の事跡に関して考証が重ねられてきた〔河原1959〕〔小川1965-67〕〔岡田1993:243-269〕。一方、明確な領土を有する国民国家が世界を覆い、儂智高のかつての地盤も二国家の国境に分断されている現状のもとで、国境の両側で儂智高は全く異なる解釈をされるに至っているが、その現代における儂智高の語り方はいまだ具体的に分析されていない。さらにベトナム側の語り方には、時期的な差異とともに、中央と地方のあいだにも語り方の相違がみられる。よって本稿では、儂智高の語り方を対比させることによって、中越両国家が多民族国家の国民統合の観点から、自国の少数民族の歴史をどのように包摂あるいは排除しようとしているのかを検討する⁽³⁾。少数民族の歴史がどのように包摂されているかは、国民統合のイデオロギーのありさまを映し出していると思われるからである。



I 儂智高の語り方

両国における儂智高の語り方は、儂智高が中越双方の現国境地帯を地盤としていたため、両国関係の変遷に左右されて変化してきた。中越関係が良好であった時代には、両国の儂智高の語り方に大きな差異はなく、双方で高い評価を受けていた。双方の語り方が相違してくるのは、両国関係の悪化後と推測され

る。1990年代に入って両国関係は正常化した。が、1950-70年代前半のような社会主義の兄弟国としての関係に戻ったわけではなく、一般的な二国間関係を築きつつある。社会主義国同士としての連帯よりも、一つの国民国家として領土の保全、諸民族の国家への統合の方が、両国にとって極めて重要な課題となったため、儂智高の事跡もその課題との関連で評価されることとなった。そのため、1990年代に入ってから両国関係の改善は儂智高評価には影響しておらず、さらに時代を分けて分析する必要はないと考える。

①中国の場合——「民族の英雄」——

中国では中華人民共和国建国後現代まで、儂智高は非常に高い評価を得続けている。まずは1950年代後半の資料において、儂智高がどのように語られているかを見てみたい。

儂智高の宋朝統治者とその地方官吏の暴政に反対する闘争は、当時の人民の意志を反映しており、そのため各族人民の積極的な支持と参加を得て、僅かな期間に広西の広大な地域にあまねく拡がった。その後兵力の大きな差のために敗北してしまうが、今にいたるまで、広西の各族人民、特に僮族（解放後から1965年まで壮族は僮族と呼ばれていた…引用者注）人民のなかには、ずっと儂智高の事跡が伝わっている [黄臧蘇1958: 20-21]。

宋代の仁宗の皇祐年間に、広源州（現在の右江靖西德保一帯）に僮族の領袖儂智高が広東の漢族進士の黄師宓、黄偉などと謀議して、安德州（現在靖西に属す）に大暦国をつくり、（中略）宋朝統治階級の圧制に反抗した [黄現璠1957: 38]。

以上のように、儂智高は宋朝の圧政に対抗して蜂起したこと、人民の意志を反映した闘争であったことなどを理由に評価されている。現代に至っても、中国側の儂智高への高い評価は何ら変化を見せていない。しかし、その理由は微妙に変わって来ている。それは、封建宋朝に抗して戦ったこと以上に、以前は

言及のなかった交趾（ベトナム）の侵略に抗して戦った「英雄」と捉える語り方が目立つようになる点である。例えば「壮族通史」は「儂智高起義（蜂起）」を「民族闘争と階級闘争」の章に入れて大きく扱い〔張主編 中1997：677-686〕、以下のように解説している。

儂智高の率いた北宋に反対する蜂起は、北宋王朝の民族圧迫と階級圧迫に反対し、交趾統治者の侵略に対して、屈服、譲歩し、容認する北宋王朝の政策に反対するものであり、壮族の歴史において大規模な正義の戦争であった。北宋王朝に鎮圧されてしまったものの、その歴史的な意義は大変大きかった。

第一に、外来の侵犯に反抗する壮民族の団結を表した。儂智高が率いた壮、漢労働人民の広範な支持を得たこの戦争は、交趾統治者の侵略と奴隷労役に反対する闘争を継続し、北宋王朝の進めた「蛮を支配する」政策に反対するものであった。（中略）唐宋時代には羈縻州として（中略）邕州に隸属していた各地域を、交趾統治者に武力を用いて侵犯・併合された後、北宋王朝は国家の領土主権と当地の首領の管轄地位を本来なら守らなければならなかったが、交趾の機嫌を損ねて事をおこすことを恐れ、（中略）何度も儂智高の内属の請求を拒絶し、兵を辺境に配置して、儂智高に対して交趾が軍事封鎖を行うのに協力した。（中略）儂智高と左右江地区の壮族人民は、存亡の選択に直面した。（儂智高は）各地の壮族首領を団結させ、共同で奮闘せねばならなかった。（中略）

第二に、宋王朝の嶺南における統治勢力に重大な打撃を与え、北宋王朝に嶺南人民に対する統治の諸政策を調整させ壮族社会の発展を推進した。（中略）

第三に、儂智高が（中略）大暦国、南天国、大南国を建てたのは、壮民族の形成と、自己統一を要求する民族地方政権の意気を反映していた。儂智高は恐らく大理政権と同様の、地方民族統一政権の創設を求めており、

壮民族の社会・経済・文化的な進歩と発展に役立ち、壮民族に交趾の蚕食併吞を一致して攻撃させ、国家の辺境を防衛した〔張主編 中1997：684-686〕。

蜂起の意義は、壮族を団結させたこと、国家の領土主権を守らなかった宋王朝に打撃を与えたこと、ベトナムの侵略に対し国土を防衛したことにまとめられよう⁽⁴⁾。封建宋王朝の対局に、壮族の「英雄」として儂智高を位置づけているわけである。また交趾と鋭く対立し、度々宋朝に服属を願っていた儂智高の行動は、現在の中国にとっては、“壮族”が古くから中国国民の一部であったことを主張するレトリックに非常に都合がよく、中国は後に述べるベトナムにくらべて、儂智高に対して矛盾無く筋の通った評価をすることができている。

また儂智高は宋との戦いに臨んで、恐らく“漢族”と思われる「広州進士黃偉」「黃師宓」という二人の人物とも組んでおり、他にも中国亡命者を多数傘下に加えていた〔河原1984：337〕が、このことは、多民族国家中国における異民族間の連携として、“壮族”と“漢族”の協力を証明するのに、格好のエピソードとなっている。

つまり現代中国における儂智高は、壮族を国民の一部としてまとめ、統合していく方策として、「民族の英雄」としてシンボル化されているのである。

②ベトナムの場合

一方、ベトナム社会主義共和国(1945年から1976年までベトナム民主共和国)における儂智高の語り方は、中越が社会主義の兄弟国であった時期と、関係悪化を経てドイモイ(刷新政策)以降通常の二国間関係を築きつつある時期で大きく変化した。さらに中央政権と儂智高の地盤であったカオバン省とのあいだにも語り方の相違が存在し、現在にいたっても統一された見解は出ていない。この背景には国家と地方の利害の相違がある。ここでは、ベトナムにおける語り方の推移と相違を検討する。

a. ハノイの語り方——「民族の英雄」から「やっかいもの」へ——

i. 社会主義の兄弟国時代

この時期は良好であった中越関係を背景に、社会主義イデオロギーののって、ベトナムにおいても儂智高に対して肯定的な評価がなされた。例えば1962年の雑誌『歴史研究』では、ベトナム人研究者が中国広西に赴いた時のことを、以下のように述べている。

桂林で仕事をした際(1955年)、我々は儂智高の歴史に関連する二つの石碑をみつけた。この二つの石碑は、儂智高の敗北後すぐの宋時代から刻まれていたと考えられる。(中略)石碑は儂智高が歴史上の人物、民族の英雄であり、11世紀の東南アジアの二つの封建勢力、中国の宋朝とベトナムの李朝に断固として反対したことをはっきりと証明していた[Tran Van Giap 1962: 52]。

また1971年には、儂智高の出身地を含むタイ族とヌン族の集住地に設立されていた越北自治区に関する出版物が以下のように述べている。

儂智高がよく知られているのは、我が国だけではない。(中国)桂林や南寧地域においても壮族が儂智高を自分たち民族の英雄と見なしている。儂智高はカオバン人で、儂存福というタイ・ヌン族の有名な首領の息子であった。李朝(ベトナム)と宋朝(中国)の二つの封建王朝の過酷な統治制度の下で、ヌン一族は越北の各民族人民と共に蜂起した。広西においてと同様、ベトナムの各民族人民は、(儂智高に)呼応し非常に多く参加し支持した。儂智高は結局敗北したが、民族に自立自強の精神を高く掲げ、少数民族が封建王朝の過酷な圧迫搾取に反対して立ち上がったという輝かしい一頁を記すことができた[Huy & Nong bien soan 1971: 71]。

これらから、中越関係が良好であった時期には、ベトナムは社会主義的な法則に忠実に、中国と同様前近代王朝を「封建王朝」として捉え、儂智高が宋朝に帰属を願い出ていたという事実は捨象して、儂智高を「民族の英雄」と位置

づけていたことがわかる。

ii. 通常の二国家関係形成時代

しかし中国との関係悪化を経て、通常の二つの国民国家同士としての関係を築くことになったドイモイ期においては、ベトナムでは儂智高に対する評価は微妙なものになった。ここでは1992年11月にハノイで開催された儂智高に関するシンポジウムでの報告をもとに、まず現在のベトナム中央政府側の儂智高の語り方を分析したい。シンポジウムは、カオバン省とハノイにある国家付属の研究機関である史学院が主催して開かれ、史学院やハノイ国家大学に属する歴史学者を中心に、カオバン省文化局の少数民族幹部も含め、15人が報告を行った。

少数民族キン族の歴史学者のなかにも見解の幅はあるが、各論者に共通するのは、多民族国家ベトナムの統合が大前提である点であり、優勢なのは儂智高の独自王国の設立に対するマイナス評価である。そのうち、儂智高に対して最も否定的な評価をくださったのは以下の史学院の研究者である。

自主独立の国家の建国と長期に渡る国家の維持という歴史をもつ各民族共同体（各民族共同体とは現在の多民族国家ベトナムを指してよく使われる…引用者注）のなかでは、団結と統一と不可侵の領土は何時でも何処でも尊重されなければならない。（中略）この原則に反する行動は国土に損失を引き起こすものであり、遅かれ早かれ克服されねばならない。そうであるから、大越の領土、或いは宋朝の領土に別の小王国を建てるような行為は皆、一掃され、敗北を免れなかったのである。（中略）しかしこの事件を巡っては、儂智高という人物が、今日までカオバンやランソンのタイー・ヌン族の住人の心情に深く刻まれていることとともに⁽⁵⁾、儂智高に関連したナールー城の址やホアアン県ヴィンクアン社の神社や、マーフック峠などの現実の旧所遺跡があることについて、我々は慎重に対処しなければなら

ず、単純な方法で考えたり処理してはならない。特に、儂智高の歴史の「流れに反した」と言わねばならない行動についての事実は、住民にとっては語り継がれてきた伝説の輝きで覆われた時間であり、簡単には捨てさせることはできない。(中略)李朝時代の我が国辺境の問題と、儂智高に起源をもつ現実の前に、極端な態度や、「左」「右」の態度をとることは、悪質分子や敵にたやすく利用される亀裂を生み出してしまうので、絶対に避けねばならない [Nguyen Danh Phiet 1995 : 92-93]。

今のところ中央政府は、ハノイのキン族学者のこの種の見解に沿っているため、儂智高は歴史的評価に困難のつきまとう人物として、積極的にはふれられない傾向がある。また多数派「キン族」からの観点で、所詮「少数派」は統合される運命にあったという見解も示されている。

儂智高の叛乱は各封建統治勢力の圧迫搾取に反抗する高地ヌン族の堅固な意志の証明であった。しかし、南天とか大南という名前を冠した小さな国を、宋朝のような強国の隣りにつくるのは、遅かれ早かれ併合されるのであるから、ユートピア物語であった。李朝の大越国によっても、縮小し弱体化させられ、当時の歴史の流れであった統一の趨勢に適合しなかった。こうして、各民族を統一して一つのまとまりにしようとする李朝の人心掌握政策は、11世紀における大越国家の建国と国家維持に大きな効果をもたらした [Truong Thi Yen 1995 : 104-105]。

そして一部には、儂智高が宋朝に何度も服属を請うていた事実は捨象、あるいは軽視して、宋朝との対立を李朝への反抗より大きく描こうとする見解がある。

儂智高の李朝に対する態度は、臣服はしなかったが、大越に進攻することなく留まった。儂家の活動の地盤は、主に宋朝の南側であった [Nguyen Minh Tuong 1995 : 125]。

宋朝の土地への儂智高の進攻は、宋軍の力を弱めることに貢献し、南方

における宋軍の力を李朝がさぐるのに役だった [Do Duc Hung 1995 : 141]。

このような見解は、以下に述べるカオバン省の意向に近いものだが、ハノイのキン族の歴史学者のなかでは、多数を占める状況にはない。かれらの多くの目には、ベトナムの国家統合に反した動きをした儂智高が、地元民に愛着をもたれているため、「やっかいもの」と映っているのである。

b. 地元カオバン省の語り方

一方、儂智高の地盤の一部であったカオバン省では、儂智高とベトナムの結びつきを強調し、宋の侵略と戦ったという文脈で儂智高を語っている。そもそもこの1992年のシンポジウムは、儂智高にまつわる史跡を観光地として開発できないかというカオバン省側の期待を実現する前提として、歴史学者の協力を仰ぎ、その歴史的評価をまずは明確にしたいという目的で行われたものだった [Dinh Ngoc Hai 1995 : 170-172]。そこで、カオバン省文化情報局の元副局長と同局博物保存室専門員の二人、つまり地元の少数民族出身の幹部が、儂智高と「ベトナム」の関わりを強調して、以下のようにカオバン地方の「伝説」を紹介している [Vuong Hung 1995] [Tran Thi Vinh 1995]。

儂智高は父と兄を李朝に殺されたが、その後ハノイに連れ帰られて、国子監学校⁽⁶⁾で17-20歳までの3年間学んだ。父の蜂起以前に田舎にいいなづけがいたが、彼はハノイでカムという女性と結婚した。彼女は儂智高に信頼され、遠い辺境地方の儂智高とハノイをつなげる大切な役割を果たした。この女性は（キン族の…引用者注）陳家の人間だったが、儂智高の母アーヌン（阿儂）と折り合いが悪く、アーヌンがカムをひどくいじめたこともあり、儂智高は3年後また故郷を離れ、再びハノイにやってきた。儂智高は（故郷では）ひどく貧しい境遇にあり、さらに極度に貧しい人々を助けていたが、ハノイに戻ってくると、そこは素晴らしいまちであり、無限に

田畑がひろがっていた。そこで古典や歴史の本を読み、何より重要だったのは平野の人々とひろく接触したことであった。また、妻の兄に従って、大越南部の沿海を荒らしていた敵を討伐にも行った [Vuong Hung 1995 : 18-23]。

また、儂智高の妻と母の対立が、儂智高の李朝に対する態度を矛盾したものにした [Vuong Hung 1995 : 19-22] として、李朝と対立関係に陥った原因を無知な母のせいとしている。

これらの「伝説」がベトナム・カオバン省のどの地域にどの程度流布しているのか、また本当に流布しているかどうか確認はとれない。しかしこのカオバン省の少数民族幹部の語る儂智高の物語は、ベトナム王朝との結びつき、キン族との関わりを過度に強調している点が特徴的である。「伝説」が語る内容は突拍子もないものに感じられるが、歴史的事実かどうかは別にして、地元カオバン省の幹部が、自分たち「民族の英雄」をどうにかして矛盾なく「ベトナム国家」の歴史に寄り添った人物像にしようと苦心していることが読みとれる。

これには、地元のタイ族・ヌン族の儂智高信仰とベトナムの国家統合の課題とのつじつまを合わせたいという願望と、険しい地形のために隣接するランソン省ほど発展の見込めない中越国境貿易を補い経済発展をはかるためにも、儂智高にまつわる史跡を観光開発したいという願望が背後にある。しかしながら、かれらカオバン省の少数民族幹部たちの願いもむなしく、ハノイのキン族の歴史学者たちからは、儂智高の事跡には国家統合と相容れないものがあると見て、お墨付きを得ることはできなかった。

II 中越両側の地元民にとっての儂智高

それではこのような国家による語りに対して、地元の少数民族たちは、実際に儂智高をどのように捉えてきたのであろうか。

①中国の場合

壮族が歴史的に儂智高をどのように位置づけていたかを検討するため、壮族の祖先に関する伝承をまず取りあげる。

広西壮族に最も広く分布しているのは、「狄青伝説」(別名「山東省青州伝説」)と呼ばれる伝承である。これは祖先が山東省青州、特に益都県の出身で、儂智高の乱の討伐のために、朝廷が派遣した將軍狄青に従って、宋代皇祐年間に広西の地にやってきたというものである。牧野巽は、祖先が同一の時代に同一の地方から同一の事情の下に移住してきたという「祖先同郷伝説」が、漢族あるいはその他の華南の諸民族に広く分布していることを指摘し、この「狄青伝説」もその一形態であるとしている〔牧野1985:142-146〕。この「伝説」がフィクションであるということは、「左・右江の始祖が南遷した漢人なりと云ふ世系の傳へは作為であつて、實はそれ以前より勢力ありし蠻酋の後である〔河原1944:44〕」と、早くに河原正博によって論じられている。つまり、宋代以前に、既に現在の壮族の姓と同様の姓をもった「蛮人」の酋領がおり、狄青に従って儂智高を討伐に来たという伝説とは矛盾しているのである。「狄青伝説」は、実際に古い時代に北方から移住してきた漢族のグループの中に生まれ、やがてそれが壮族に取り入れられていったものとされる〔牧野1985:146〕。つまり多くの壮族が祖先を“漢族”に同定し、儂智高を討伐に来た側に自らの祖先を位置づけてきた⁽⁷⁾。瀬川昌久はさらに、「狄青伝説」とは別に、広西の東部賀県には北京、湖南省衡州、広西の慶遠府などと場所はまちまちであるが、「珠璣巷」という同一の地名を祖先の居住地とする祖先移住伝承をもつ壮族がいることを指摘し、この「珠璣巷」が、漢族系広東人の祖先移住伝承に登場する地名と同様であることから、それぞれの特定の壮族グループが、最も漢化の影響を強く被った漢族グループの移住伝承を、取り入れて伝承していったものであろうと論じている〔瀬川1996:237,240〕⁽⁸⁾。ここからわかるのは、“壮族”の内部の多様性ととともに、“壮族”にとっては、“漢族”起源であることこそがステータスと

なってきたということである。祖先は儂智高を討伐に來たのだと主張する壮族たちに、伝統的に儂智高をプラス評価する意識があったとは考えがたい。

中国側の出版物によると、広西壮族自治区南部と雲南省文山地区には、儂智高に関する伝説や神話、遺跡が数多く残っており、地元民に崇拜されていると言う。例えば儂智高についての伝説は、広西靖西県三套集成領導小組 [1987] 『靖西民間故事集（第1集）中国民間故事集成広西巻』23-74頁に、収録されているように多数にのぼる。しかしこの故事集も、その収録時期は中華人民共和国が儂智高を高く評価し始めたのちであり、一般の人々が収録されているように儂智高への共感を持って言い伝えていたかどうかは確認できない⁽⁹⁾。また長年中国広西で民族学研究を続けてきた范宏貴は以下のように述べている。

靖西、徳保、天等県の壮族は毎年正月30日の晩には、門を閉めて祖先祭祀を行う。祖先とは儂智高であり、外部の人間は屋内に入ることができず、邪魔をすることは許されない。靖西県湖潤郷には、儂智高洞が存在している。徳保県大旺郷には儂智高の廟がある。武鳴県暗山の紫金嶺には儂智高のつくった陣地跡がある。人々は儂智高を崇拜し、神格化している[范2000：63]。

しかし筆者の范への聞き取りによれば、上記の正月の祭祀はあくまで同一親族内の祖先祭祀である。儂智高が多くの壮族の信仰を集め、祭祀が大々的に行われているという事実は歴史的に存在しない。現在中国側では、儂智高の洞や廟と称されるところには、入り口に目立ちやすく説明の石碑が建立されたりしているが、これらが整備されたのは1990年代半ばである。例えば、靖西県では壮族出身の県の共産党委員会幹部、儂芸青という人物が、定年後積極的に資料・資金集めを行い、洞のそばの石碑を建造した⁽¹⁰⁾。

儂智高伝説が残るのは靖西県、徳保県など広西西部の一部に偏っており、儂智高信仰が残るのも以下に述べるようにベトナム・カオバン省の北半分のみであり、カオバン省の南東にあたるランソン省や、南にあたるバクカン省など他

のタイ族・ヌン族の集住地域には、儂智高信仰は全く見られない⁽¹¹⁾。つまり、現在のタイ族・ヌン族・壮族の居住地域全体からみると、儂智高の影響が何らかの形で残った地域は非常に限定されている。儂智高が左江上流地域の地盤から右江まで進出し、勢いづいて広州まで包囲したのは事実であろうが、ごく限られた一時期の現象であり、基本は儂氏の反乱であった。儂智高に対する強い印象をもった人々は局地的だったと推測される。

これは、壮族・タイ族・ヌン族の歴史的な居住形態や共同体の有り様と関連づけると理解しやすい。塚田誠之は、壮族が広西の土着民であるとされていた前提に疑問を提起し、多くの小規模集団に分かれていた壮族が、波状的移動によって、貴州、湖北湖南、広西西北部辺境地帯の各地から広西へ移住したことを指摘し、壮族が極めて複合性をもった形成過程を経ているとしている〔塚田2000(2): 9, 24-25〕。更に明代初期、広西来住の壮族は、20家ほどの小規模な山間の村落に居住し、焼畑耕作や狩猟採集生活を営んでおり、村落レベルを超えた政治的統合を持たなかった〔塚田2000(2): 35〕。中越国境を取り払った形で、塚田の言う小規模集団による波状的な移動が進行したとすれば、初期にベトナムに入植したタイ族の祖先にあたる人々も、同様の状況で移住してきたと推測され⁽¹²⁾、一族ごとに形成した集落(バーン)が、基本的な共同体となっていたと考えられる⁽¹³⁾。このように、タイ系現地民が政治的な中心地をもったことがないというに、内部が均質でなく非常に複雑性のある集団であったということは、前近代においては民族的なまとまりを欠いた存在であり、集落レベルを超えた政治的統合や民族意識を持たなかったということを推測させる。

つまり、壮族の共同体の歴史と構造を検討すると、朝廷への「反逆者」として位置づけられてきた儂智高が、「民族の英雄」として一般に浸透していくのは、中華人民共和国の民族政策の結果であったことが明らかとなり、もともと民族の共通記憶としての「英雄」は、存在していなかったと言える。中国は壮族を国民として一つにまとめていくために、シンボルとして「儂智高=民族の

英雄」というイメージを創り出そうとし、その結果、儂智高を顕彰しようとする現象も新しく生まれることになった。

②ベトナムの場合

中国側で一般の壮族による儂智高信仰や事跡への顕彰が始まったのが非常に最近であるのに対し、儂智高の地盤の一角を占めたベトナム・カオバン省北部には、歴史的に儂智高信仰が存在してきた。中国に儂智高信仰がみられないのに対し、カオバン省に依然信仰が残っている理由は、漢族の漢化圧力が常にキン族のキン化圧力に比べて強大であることに起因していると思われる⁽¹⁴⁾。1968年に、タイ族・ヌン族についての初めての解説書を編纂したラ・ヴァン・ロ (La Van Lo) は、

儂家の首領であった儂智高は、ベトナム北部と中国南部のタイ・タイ語系に属するほとんど全ての民族、タイ、ヌン、壮の首領となった。儂智高にまつわる伝説を今でも人々が言い伝え、儂智高を祀った祠堂は地元の多くの参拝者を集めており、地元の人々は彼を民族の英雄と見なしている [La & Dang 1968 : 27-28]。

と述べている。また口は、ベトナム側では儂智高を祀る神社 (den tho) がカオバン省の北半分に多く点在し、ホアアン県ヴィンクアン社ガン集落 (Hoa An, Vinh Quang, Ngan)⁽¹⁵⁾のキーサム (Ky Sam) 殿のほか、ザンチュウ社ズア集落 (Dan Chu, Dua), ハークアン県ソックハー社ホン集落 (Ha Quang, Soc Ha, Hong), コックヴオン集落 (Coc Vuong), フックホア県の中心地フックホア町などを神社の存在する場所として挙げている [La & Dang 1968 : 28]⁽¹⁶⁾。このうちホアアン県ヴィンクアン社のキーサム殿は、ホアアン県が建物や石碑を整備したうえ、文化財として指定している。最大の祭は豚を捧げるもので陰暦1月10日に行われ、人々の正月の楽しい集いの日にもなっている [Ly Thi Tieu 1995 : 46] と言い、この祭はヴィンクアン社主催である。ハークアン

県ソックハー社コックヴオン（ポーショック・Po Sloc）集落の方は、資料によれば寺守もあり [Vuong Hung 1995 : 12]、毎年春分から15日目の清明節に豚をさばいて捧げ、その日は人々はお参りに行くために仕事を全て休む [Ly Thi Tieu 1995 : 46] などとされているが、筆者の現地調査では実際は周辺の人々がつくったと思われるセメントでかこった簡単な祭壇と、そのそばに建て替え時の寄付者名を列挙した成泰拾壹年（1899）の銘のある石碑が草に隠れているだけだった。さらにハークアン県ソックハー社ホン集落では、祭壇は残っているが、地元の人々はもはや儂智高を祀っているという認識はなく土地神であると答えた。またザンチュエ社ズア集落では、儂智高を祀る祭壇や神社は存在しないとのことであった。これらの地域のなかには、中央政府に史跡指定などの意思もないため⁽¹⁷⁾、信仰が廃れつつあるところも出ているが、一方で地元の人々の伝統的な信仰が一部続いているのも確かである。

前近代には儂智高への否定的評価が定着してきた中国で、現在儂智高を祀りあげ、「民族の英雄」と位置づける動きが盛んになっているのに対し、歴史的事実として儂智高信仰が存続してきたベトナムでは、逆に、儂智高を黙殺しようとするベトナム政府の姿勢が見えるのである。

むすび 自国史と「少数民族の英雄」

ベトナムと中国それぞれの儂智高の語り方に見られる特徴は以下のようにまとめられる。まず中越が特殊な社会主義の兄弟国同士の関係を維持していた時期には、原則的な社会主義理論を中心にすえて、「封建」王朝を「悪」の側に置き、儂智高を「民族の英雄」と位置づけていた。そのため、儂智高が中国とベトナムという二国家のうち、どちらにより近かったかという現在の国民国家の統合に結びついて解釈されやすい問題を避けることができていた。

しかし、両国関係の悪化を経て、その語り方には差異が現れる。一国民国家

として領土保全が焦眉の課題となった現在、中国側では、封建宋朝対儂智高という捉え方には変化はないが、李朝と鋭く敵対していた儂智高を、ベトナムという外部勢力の侵略と戦ったという点から高く評価するようになっている。当時儂智高の出身地周辺は、実際には中越どちらに帰属するかまだあやふやな状況であったが、中越両国家とも、今現在は国家としてのまとまりを強化することが至上目的となっており、中国は国家の防衛という国家目標を強化する言説として、儂智高の乱の意義を強調することに成功している。また儂智高が、南漢の亡命者と考えられる漢族と連携していたというエピソードが、多民族国家の統合を宣伝するのにも役立っている⁽¹⁸⁾。宋朝に幾度も服属を請うていた儂智高の事跡は「中華民族史」の一角にうまくはまりこむ内容なのである。

その他、中国で儂智高が高い評価を得ることに成功している理由は、少数民族中最多人口を誇る壮族は、歴史を評価、記録していく人材に恵まれており、壮族知識人自身の語りが公定の語りとなりうる条件をもっていることがあげられる。パーマーによれば、中国共産党は1940年代後半から、多様性のある孤立した人々を中国という国民国家に統合するために、壮族という範疇を認定し [Palmer 1998: 5-6], 国民を構成する一員としての「壮族」づくりを進めてきた。儂智高に引きつけて考えれば、中国は儂智高が「民族の英雄」であるとの認識を浸透させ、それによって壮族としてのエスニシティを構築させ、一体感を醸成しようとしてきた。パーマーはさらに文化大革命を挟んで、中央の統制が緩むと、今度は1950年代に国家が養成したミドルクラス（省や県）の壮族幹部が、「壮族」をシンボルとして使い、地方レベルからの要求を行うようになっていると言う。確かに中国で壮族に関わる歴史書や民族学関係の著作を編纂しているのは、地元広西出身の壮族研究者が多い⁽¹⁹⁾。また広西には広西壮学会が壮族の文化、経済、政治を発展させるために、行政幹部と壮研究者の270人をメンバーとして1991年に設立された [Palmer 1998: 178] [壮族百科辞典編纂委員会編1993: 230] が、このような組織は、ベトナム側のタイ族・ヌン族に

は見られないものである。広西にはこのように壮族知識人層の厚みがあり、地元広西から自分たちの独自の壮族アイデンティティを主張して、壮族としてのステータスを確保しようとする人々が多いと言える。換言すれば、壮ナショナリズム⁽²⁰⁾や壮族の自治のシンボルが、広西の省や県レベルの幹部や壮族知識人にとっては、非常に重要なものになっており、「民族の英雄儂智高」は、そのシンボルの一つなのである。儂智高伝説が残るのは広西のごく一部に限られ、儂智高信仰も歴史的には存在していなかったにもかかわらず、儂智高が高い評価を受け「民族の英雄」に祀りあげられているのは、このような広西の地元幹部や知識人の要請があるからである。そして、1950年代から1960年代前半にかけての国家の政策と、1980年代以降の地方の政策の過程を通じて、儂智高は壮族全体の「英雄」であったかのように錯覚されることになったと言える。

一方ベトナムでは、中国との関係が悪化すると、李朝は封建王朝としてマイナス側面を指摘されるよりも、宋朝によるベトナム侵略に対抗した民族王朝としての評価が高まった。しかし、その李朝に対して反旗を翻し、独立王国まで設立し、何度も宋に服属を願い出ていたという儂智高については、その事跡をどう解釈し、多民族国家ベトナムにとって国是である国民統合という現代的課題とどう折り合いをつけて語るかという非常に困難な問題が生じた。そのため、儂智高を以前のように「民族の英雄」などと、楽観的に描くことはできなくなり、中央では積極的な評価は見られなくなったのである。1970年代後半から大国中国を北にひかえて、その脅威に対応することを強いられ、一時は中越戦争にまで至るという歴史を背負ったベトナムにとって、宋朝に服属を願っていた儂智高は、自国史に取り込むには困難な事跡を残しすぎていた⁽²¹⁾。

ベトナムで歴史上の「英雄」として祀られて来たのは、中国の各王朝との戦いで活躍したハイ・バー・チュンやリー・トゥオン・キエット（李常傑）、レ・ロイ（黎利）などであり、社会主義政権の下でも、たとえそれがベトナム「封建王朝」に属する人物であっても、非常に高く評価されてきた。つまり、ベト

ナムにおいては、中国との戦いで活躍した歴史上の人物に関し、社会主義イデオロギーによる評価の激変はほとんどないと言ってよい。儂智高は中国王朝と戦ったという点では、これらの「英雄」達と共通するものの、一方でベトナム王朝とも鋭く対立し、中国に服属を願い出ていた。つまり、ベトナムという祖国の「英雄」に成りうるための重要な条件を、満たすことができなかったと言える。

ベトナム側では、険しい地形のため隣のランソン省ほどには中越国境貿易を発展させ豊かになることを望めない儂智高の地元カオバン省が、儂智高をシンボルに観光開発をしたいという希望をもっている。しかし、ハノイの歴史学者達は多民族国家の統合の観点から、儂智高の観光開発にお墨付きを与えなかった。ベトナム国家の自国史のなかに儂智高はうまくはまりこまず、カオバン省のもくろみが成功する可能性は低い。

また、中国と比較してベトナムでは、タイ族・ヌン族の研究者だけで歴史書が編纂できるほど地元の人材が少ない。その理由は、人口規模が壮族よりかなり小さいことに加え、壮族エリートが広西壮族自治区の中心地南寧に多数いるのに比べて、タイ族は、知識人がハノイに出ていってしまっただけで国家レベルの幹部として活躍している例が多いことがあげられる。北京と広西との距離に比べて、首都ハノイからタイ族・ヌン族居住地までの距離は物理的にも心理的にも近く、壮ナショナリズムに相応するようなタイ族・ヌンナショナリズムの動きといったようなものもない。これはベトナムのタイ族・ヌン族が、早くからキン族共産主義者の主導した革命運動に積極的に参加して政権の中枢にも入り込み⁽²²⁾、ベトナム国民としての意識を強く持つようになっている人々が多いため、タイ族・ヌン族独自の政治的主張といったものが弱いせいである。かつベトナムでは1975年12月に越北自治区⁽²³⁾が消滅してしまっただけで、タイ族・ヌン族地域を覆うような行政区画はなく、かれらはカオバン、ランソン、バクカン、ハザンなどの各省に分散している。このような背景から、ベトナム

では、かれら自身が中心となって、自分たち自身の歴史を記述できるというような体制になく、儂智高の公式な語りを決定するのは多数民族キン族の役割となっている。

こうして、中国は儂智高を自国史のなかにうまく包摂することに成功したが、ベトナムは自国史から儂智高を排除したままであり、抹殺しないまでも黙殺しているのが現況である。

- 1 李方桂による分類では、タイ諸語を使用する人々は、北タイ諸族、中央タイ諸族、南西タイ諸族に分けられるが、このうち北部壮語を話す壮族が北タイ諸族に入り、南部壮語を話す壮族とタイ族・ヌン族が中央タイ諸族に分類される。ごく簡略化すると、中国で“漢族”の影響を強く受けた人々が“壮族”となり、中国から早期にベトナムに移住してベトナムの多数民族“キン族”の影響を強く受けた人々が“タイ族”となり二者は分化していった。そして“壮族”のうち、時代が下ってからベトナムに移住してきた人々が“ヌン族”となっていったとされる。“タイ族”と“ヌン族”の移住時期の相違は両者のあいだに経済・社会・政治的格差を生み階層を形成した。また両者の相違点としては、前者がベトナム前近代王朝の支配の末端に組み込まれるなどして「ベトナム」との結びつきを権威のよりどころにしていたのに対し、後者は「中国」的なものに愛着を感じていたと言える。近代に入り民族概念が持ち込まれた際に、それぞれが「民族」の枠組みで区別されるようになった[伊藤2000]。タイ族・ヌン族は、現在のベトナムの54の公定民族のうちの二つであり、同じく壮族も中国の56の公定民族のうちの一つである。1999年の全国人口調査で、ベトナムの総人口約7632万人中、多数民族キン族約6780万人、タイ族約157万人、ヌン族約93万人となっている[Central Census... 1999: 7][Cac dan toc o Viet Nam 1999: 4]。壮族は1990年の統計で約1550万人である。タイ族、壮族はそれぞれの国内で最多の公定少数民族である。壮族については近年内部の多様性が指摘されており[塚田2000(2): 9, 24-25]、「壮族」の枠組みは中華人民共和国の国家建設の過程でつくりだされてきたものだという議論もされている[Palmer 1998: 5-6]が、本稿はエスニシティの差異や変容、創造を論じる目的ではなく、国家が少数民族を国民として統合していくために、民族のシンボルをどのように用いるかというテーマに重点を置いているので、民族の枠組み

を可変性のあるものとして捉えることに関する検討は行わず（この問題に関しては、[伊藤2000]を参照）、国家による公定民族分類を用いて、タイ族・ヌン族、そして壮族というカテゴリーをそのまま使用する。

- 2 儂智高の乱の概要について、以下[河原1959][岡田1993][范2000]に依拠してまとめておく。なお本稿は儂智高とその時代を歴史学的に検証するのが目的ではないので漢文史料の考証は略す。上記の3稿で使用されている漢文史料は「統資治通鑑長編」「文献通考」「宋会要稿蕃夷」「皇朝編年綱目備考」「宋史」「広西通志」「南寧府志」などで、[范2000]は加えて「大越史記全書」「越史略」を用いている。

中国側では中央王朝が地元の有力者を用いて地方を間接的に統治する土司制度が、宋代に始まった[張主編 中1997:596]。しかし11世紀にはまだ中越の勢力範囲は流動的だった。宋が南漢を倒したのち、のちに儂智高の地元となる広源州（現在のベトナムカオバン省クアンホア県周辺）から、儂民富という土豪が977年に宋に朝貢し官職を得ている。しかし3年後の980年、宋の太宗のベトナム出兵が行われこれが失敗すると、その後50年近く儂家はベトナムに帰順していたらしい。このように儂家は中国王朝に服属したり、あるいはベトナム王朝に貢納したりしていた。しかし1028年ベトナム李朝の太祖李公蘊が死ぬと、それに乗じて儂智高の父存福は、翌1029年宋に服従して交趾（ベトナム）の圧力から逃れようとした。しかし宋がこれを許さなかったため、存福は宋の辺境に攻め入って勢力の拡張をはかり、また1038年には交趾の支配から脱するため乱を起した。そして自ら昭聖皇帝と称し、妻の阿儂を明德皇后となし、長子智聡を南衙王に封じ、広源州を改めて長生国を建てた。しかし、まもなく交趾の討伐をうけ、翌年父存福と智聡は捕らえられて殺された。智高は、母阿儂と共に帰順州（現在の中国広西靖西県）へ逃亡し、交趾の手を逃れた。こうして父のあとを継いだ智高は、1041年再び父の根拠地にもどり、その地にあらためて大暦国を建てた。ベトナム李朝の李徳政はこれを討ち、儂智高を生け捕りにするが、智高が父と兄を既に殺されていることを憐れんで罪を免じ、もとどり広源州を与えた。しかし1048年に儂智高は、帰順州から再び李朝に反旗を翻す。安德州（広西靖西県安德郷）に拠り、そこに国を建てて南天国と号し年号を景瑞と称した。このように、儂氏は交趾に幾度も反抗したが、その都度交趾の圧迫をうけ、その勢力は左江から右江上流域へと移動していった。1051年儂智高は再三宋に服属を願ったが、宋側では交趾と事を起こさないよう配慮し、彼の願い出を許さなかった。そのため交趾と既に仇敵となっていた儂智高は、

今度は宋へ攻め入った。1052年、儂智高は中国人亡命者と策謀し、まず横山寨（広西田東県）を攻め、さらに邕州（広西南寧）を攻めこの地に大南国を建て、仁恵皇帝と称し、阿儂を感星皇太后、長子を皇太子とし、部下にも中国式の官名を授けた。そして鬱江を下りながら周辺諸州を陥落させ遂に広州を包囲した〔岡田1993：247-248〕。しかし宋朝から武將狄青が派遣される。宋朝のなかには、儂智高を討つことを願い出た交趾に出兵させれば、その効果がなくとも、二者を相互に離反させることになるから有利であるという意見もあったが、儂智高の討伐に蛮人である交趾の援助を求むべきではないという狄青の策が採用され、宋は交趾の援兵を拒否した。狄青は崑崙関（現在の広西邕寧県と賓陽の境付近）を越え、1053年に儂智高の軍と会戦し大勝した。儂智高は雲南特磨道（雲南省広南県）へと逃亡した。母の阿儂、弟の智光、子の継宗、継封も捉えられて殺された。こうして儂智高の乱は平定された〔河原1959：43-44〕。

- 3 筆者が儂智高の評価について、中越両側から考察しようと考えたのは、吉開将人の博士論文『南越史の研究』（2000年度東京大学大学院人文社会系研究科提出）に基づく報告を聞いたのがきっかけである。南越は紀元前2世紀頃、現在の広東、広西、ベトナム北部を支配した政権である。『南越史の研究』は、第II部『南越』をめぐる歴史認識－歴史のなかの『南越』像において、中国、広東、あるいはベトナムにおける南越王趙佗と南越をめぐる歴史意識の変容が論じられ、重層的な「南越史」像が描かれている。吉開の著作は「中国世界を内地と周辺からなる多元的かつ重層的な構造によってとらえ、その成り立ちを古代まで遡って考える〔吉開2002：357〕（筆者は2002年の改訂版を利用）」という壮大な構想のもとに執筆されており、「中国の地方やベトナムに『主体性』を見出す」ことだけに目標を置いたものではない。だが、筆者自身はベトナム現代史が専門であり、民族と国民国家の関わりという課題を検討する上で儂智高に着目したため、中国とベトナムという二つの国民国家における語り方に対象を絞り、時期もここ半世紀弱に限定した。

- 4 儂智高の蜂起の意義については、〔壮族簡史編写組1980：64-65〕〔黄&黄&張編1988：753-757〕などでも同様に論じられている。

- 5 後に述べるが、儂智高信仰や彼にまつわる遺跡が残るのは、カオバン省の北部半分に限られ、カオバン省の南半分やランソン省には実際は存在しない。

- 6 最初の科挙は1075年に開始されたと言われ、国子監は1076年にハノイの文廟の敷地内におかれた〔今井1999：293〕。国子監は科挙制度を機能させるための中央の教育機関であった。北部ベトナムに最初に成立した長期安定王朝、李朝

であるが、儂智高の乱が起こった11世紀前半にはまだ勢力範囲を確立しつつある途上であり、儂智高が17-20歳であった1038-1041年頃に、ハノイの国子監で学んだということは歴史的事実としてはありえない。

- 7 [谷口・白編著1998: 63-64, 405, 508, 528, 552, 564, 612] から、家譜や墓碑で“壮族”土司の主張する系譜を挙げてみる。

南丹州莫氏(現南丹県): 始祖は山東省青州府益都縣白米街の人。宋の太祖開宝(968-976)から雍熙(984-987)年間に、南丹溪洞蛮の征伐に功があったので、宋の神宗の時に南丹知州に任ぜられた。

恩城州趙氏(現大新県恩城): 山東青州府益都縣人。狄青に従い南蛮儂智高を征伐に来た。

思陵州韋氏(現寧明県の西南からベトナムにかけての地域): 山東青州府白馬縣の人。宋朝皇祐五年に狄青將軍に従って儂智高討伐にやって来た。

茗盈州李氏(現大新県全茗郷): 山東青州府益都縣白馬街の人。皇祐五年に狄青に従って儂智高の討伐にやって来た。

下雷州許氏(現大新県下雷): 山東青州府益都縣白馬街住人、狄青に従って皇祐四年儂智高を討った。

その他筆者が1999年3月に広西壮族自治区でフィールド調査を行った際に、得られたインタビュー証言や資料から、更に例をひろう。

憑祥鎮柳班村板透屯 李氏 山東省から宋代に来た。土司ではない。

憑祥鎮竹山村芭滿屯 閉氏 山東省から来た。土司かそうでないかは不明。

憑祥夏石鎮夏石村東門街 閉氏 山東省から狄青に従って儂智高の討伐に来た。土司。

- 8 瀬川はこれらの例を通じて、「古くから既に今日と同じエスニシティーを供えた、いわば完成品としての民族集団である『壮族』や『広東人』が存在し、それらが互いに遭遇したと仮定することは妥当ではない。むしろ、過去における親族集団や村落といった小集団レベルの接触の積み重ねの結果が、今日の民族意識や民族カテゴリーのあり方を作り出したと考えなければならないだろう」としている[瀬川1996: 241]。

- 9 例として儂智高にまつわる伝説の一つを以下に紹介する。題: 「谷納の紅い楓」

那坡県城廂鎮から遠くない地域に、「谷納」と呼ばれる深い谷があり、5人がかりでやっと周りを抱えられるような楓の大きな木がある。高さは7-8丈、根は

曲がり節はぼこぼこ、青々とそびえており、毎年秋が深まって黄金色の風が吹くと燃えさかる巨大なたいまつが、谷の中に立っているように見える。毎年この楓王が紅くなったのち、ほかの楓も皆紅くなり、赤い火の世界をつくると言われる。なぜ楓の葉が秋に紅く変わるのか、以下の美しくも悲しい話を聞いてほしい。

宋の皇祐年間、朝廷は狄青率いる100万の兵を送り儂智高を討った。九九八十一戦を戦い、儂軍はついに数不足で敵に対抗できず、安德照陽関付近でちりぢりバラバラになった。一部の将兵が傷兵を助けながら楓の茂っている谷納の谷間に入って駐屯した。そして、ここの険しい地形を利用し当地の各族の人々の大きな助けを得て、傷兵を手当しながら一方で戦闘を堅持した。その年の秋、狄青の武將、楊文広が万からなる朝廷の兵を率いて山間部に進攻してきた。そして幾度も気が狂ったように攻め入ったが、その都度義軍に撃退された。正攻法がうまくいかないのて楊文広は懷柔策を用い、もし義軍が武器をおいて投降するなら、官吏の職と天下の榮華と富を保証すると言った。英雄的な義軍のなかにそんなことに耳を貸すものがいようか。皆の心は石のように固く、死んでもくじけず、絶対に投降しないことを誓った。楊文広は恥ずかしさのあまり怒りだし、自ら軍を率いて攻め入った。義軍は勇敢にねばり強く戦い、虎や龍のごとく血みどろになり、その鮮やかな紅い血は、山の楓をみな紅く染めた。官軍は百千もの兵を失いどらを鳴らして撤退した。

戦いの最中、楊文広は悪辣な策略を思いつき、多勢をかさにきて、水ももらさぬほど嚴重に包囲した。このため人々も助けようがなく、義軍は林を出た鳥、水から出た魚のように、ついに矢も食糧も尽き、包囲を突破できずに、最後は一人一人山奥の谷で飢え死んだ。かれらは死んでしまったが、勇敢な魂は死ぬことはなく、固い甲羅の裂けた鷹嘴亀になり、自分の体と亀甲でもって、当地の各族人民の支援の恩に答えたのであった。

何年もがたち、ここの鷹嘴亀は増え拡がり今に至っている。谷納の谷にはいまだこの種の亀が成長し、谷の楓はあの年の秋に血の紅に染まって以来、毎年秋が来ると、皆全て紅に変わり、勇敢で強力だった義軍を記念し、不屈の不朽の精神と闘志を記念しているかのようだ。現在谷納の谷のあの楓の王を称する立派にのびた大楓の木は、あの年の兵火後も幸いに残り、特に大きく特に紅く染まっている。(略)語り：黃漢超，収録者：葉冬生，伝説の残る地域：那坡県一帯 [広西靖西県三套集成領導小組1987：36-37]。

- 10 范宏貴は、大新県下雷郷の農開泰という人物が一族に代々伝わる「儂治高傳

詩」と題する詩を、子孫のために壬戌の年（1922）に書き記したものの写しを所蔵している。農開泰の甥、儂兵が1999年に書き写して范宛に送ったものである。ここでいう儂治高は儂智高と同一人物といい、七言の長詩には儂智高の乱の経過に似た戦いが語られている。特に、儂治高が戦いに負けた後の5人の子供たちの行く末が悲痛な調子で詠まれ、5人は父を葬ったのち兵糧が尽き逃散するが、4人は広南で殺され、ただ第3子だけが逃げのびたとされている。この詩の信憑性はさておき、口頭で一族のみに言い伝えられ、清朝滅亡後に初めて書き記されていることから、王朝が継続していた時代は、儂智高の子孫であると公の場で名乗ることはこの地域の“壮族”にとって名誉ではなかったと推測される。

- 11 ランソン省のタイ族・ヌン族には、通常祖先崇拜や土着化した道教、まれに仏教信仰が見られるが、儂智高信仰はみられない。またランソン省は1999年に888頁にも及ぶ大作のランソン地誌を出版した。しかし、儂智高が出てきても不思議のない部分では「11世紀の30—40年代、カオバンのノン家の酋長達は、李朝に対して兵を挙げた」という記述があるのみで、儂智高の評価どころか名前さえ登場しない冷ややかな扱いをしている [Uy ban Nhan dan tinh Lang Son 1999 : 181]。対照的にカオバン省の出版したカオバン地誌においては、儂智高は、歴史の部分、名所旧跡の部分、文学の部分に繰り返し登場している [Tinh uy-Uy ban Nhan dan tinh Cao Bang 2000 : 109-111, 504-504, 579-582]。
- 12 タイ族には、もともと“キン族”であった者が、ベトナム王朝より辺境防備のために派遣されてきて官職を世襲し土司となったり、漢字を教えに来たり、戦乱から逃れて山間部にやって来て土着化した例もあると言われるが、タイ族の祖先の多くは、中国領から移住してきている。けれども現在では、平野部からやってきた“キン族”の祖先をもつと思われる一族だけでなく、祖先が中国から移住してきたと考えられる人々も含めて、「キン族起源」伝説をもつ一族が多い。詳細は [伊藤2002 : 35, 66-67]。
- 13 タイ族の集落バーンの平均的な規模は、紅河デルタのキン族の場合と比べると、自然村落ラン (lang) よりも自然集落ソム (xom) に近い。そのため本稿では、バーンの訳として基本的には「集落」を用いる。タイ族は、現在でも高齢者を中心に、地名に言及する際や出身地を尋ねられた場合、行政村落である社 (xa) の名称ではなく自然集落であるバーン (ban) の名称を挙げるが多く、かれらの帰属意識がもともとはバーンにあったことを彷彿とさせる。
- 14 例えば、中国側では「土官は不安定な政治的基盤を補完すべく、儒教文化を

選択的に受容して子弟に科挙を受験させた」[菊池1998:161-162, 347]というが、たとえ地位安定のためであれ、土官側から積極的に科挙を受験するというような状況は、タイ族とベトナム王朝との関係には見られない。また通婚を媒介とする壮族の漢化は、地域によっては、言葉以外に区別が難しいほど進んだと言う[菊池1998:410-414]が、タイ族地域ではそのようにキン化が進行するという状況は見られなかった。

- 15 ベトナムの地方の行政単位は、省(tinh)－県(huyen)－社(xa)(行政村)－集落であり、カオバンを含む東北部山間部では集落単位として、平野でよく用いられるソム(xom)のかわりにバーン(ban)という語を用いることが多い。
- 16 他にもバオラック県やトンノン県にも分布すると言う[Ly Thi Tieu 1995: 46]。筆者は2002年7月、ベトナムにおける儂智高信仰の状況を確認すべくカオバン省より調査許可を取得したが、8月初旬の渡航後、外国人が辺境地域へ入ることを禁止する政府の公文が突然出され、詳細な調査を行うことはできなかった。そのため筆者が確認できたのは、ホアアン県とハークアン県のみである。
- 17 中央政府の儂智高に対する方針は、これらの史跡への扱いと、現在のタイグエン市北部を中心に勢力をはっていた同じく“タイ族”のズオン・トゥ・ミンに対する扱いを比較すると歴然とする。カオバン省の南方のタイグエン市から、国道3号線を北西へ約24キロ行った地点に、ズオン・トゥ・ミンを祀った神社(den)が立派に整備されている。神社に建てられた碑によれば、彼は李朝時代の12世紀前半に活躍した地元フルオン(Phu Luong)府のタイ族の首領で、宋朝の侵略攻撃に対して、大越国の北部の広い地域を守り功をあげた。彼を信頼し功に報いるため、李朝の仁宗と英宗は王女をミンに嫁がせたと言う。2001年にはタイグエン省の文化通信局がミンを紹介するパンフレット(Nui Duom va Duong Tu Minh)を編集している。中国王朝に対して明確に敵対し、李朝から二人も王女を娶ったミンは、現在のベトナムの国民統合の観点からも、好ましい事跡をもつ人物と言えよう。歴史的には儂智高ほどの知名度はないミンの神社が立派に整備され、観光客用パンフレット販売が認められていることから、儂智高と異なり、ミンはハノイからベトナム史を構成する一部として位置づけられていると言える。
- 18 村田雄二郎は、中華民族アイデンティティに関する費孝通の言説について、以下のように述べている。

これ(中華民族としてのアイデンティティ)は「炎黄子孫」(炎帝・黄帝は中国古代の伝説上の始祖)といった共通の出自、あるいは長城や黄河などのシン

ボルと結びつけて自明視されることが多いが、(中略)20世紀の民族解放闘争とりわけ1930年代の抗日戦争の過程で初めて成立したものである。この点に関して費孝通は最近の香港の講演で、「中華民族は対自的な民族実体としては、中国と西洋列強との百年來の対決の中で出現したものではあるが、即自的な民族実体としては数千年の歴史の中で形成されたものである」と述べている。彼の論点を要約すれば、中華民族とは漢族を中核に、孤立分散した多くの民族単位が長期にわたる接触、混淆、連結、融合を繰り返して形成された「多元的統一体」である、ということになる。だが、この議論には多民族国家の現状を過去に投影して解釈するという遠近法的逆立が見られる。何より中華民族が単一の民族実体として現に存在しているのか大いに疑わしいし、また中華帝国との対比で述べたように、中華民族とはどう考えても近代の歴史的産物に過ぎないからである。この点から見れば、中華ナショナリズムは現実の国家利益に専ら奉仕する公的イデオロギーであると言わざるをえない [村田1994：44-45]。

儂智高が「民族の英雄」と位置づけられているのは、村田の言う「遠近法的逆立」という方法による歴史解釈のためである。多民族国家中国の統合に奉仕するシンボルとして利用するために、その歴史解釈がなされているわけである。

- 19 例えば引用した [張主編1997] の場合北京で出版されているが、執筆者の民族籍と現在の居住地は以下のとおりである。

	広西	雲南	北京	その他
壮族	18	1	4	1
漢族	9			1

- 20 広西壮族自治区では、壮ナショナリズムのシンボルの一つとして壮文字教育やその普及が熱心に行われているが、それについては、[Palmer 1998：193-204]を参照。パーマーは、中堅幹部のあいだにある壮ナショナリズムの存在を強調しているが、しかし一方で方言の差などが影響して、依然として壮族意識には非常に強い地方性があり、それゆえ壮族として団結することができないでおり、中国からの分離の方向に向かう可能性もそのためにないとしている。[Palmer 1998：236-245]。

- 21 桃木至朗は、ベトナムで抗米戦争中に確立した「民族解放闘争史観」が、単なる民衆動員のプロパガンダにとどまらず、考古学や民族・民俗学と結びついてベトナム史を豊かにしてきたと同時に、至上の目標である国民国家建設のために一国史観を極限までおしすすめた史観であるため、国民国家をゆるがしか

ねない民族概念そのものの理論的研究は制限され、地域史や国際環境にかかわる研究は、ドイモイ以前には全く不可能であったこと、ドイモイ後も一国史観はやはり支配的で、一国史とちがった構造やネットワークを解明する動きが弱いことを指摘している〔桃木2000:19-20〕。

- 22 例えば、2001年4月よりベトナム共産党の最高位である書記長を務めているのは、タイー族のノン・ドゥック・マインである。
- 23 1956年よりタイー族・ヌン族の集住地域である越北地方に設置されていた。

参考文献（日本語、中国語、ベトナム語、英語の順）

- 伊藤正子〔2000〕「国家の少数民族政策とエスニシティの変容ーベトナム北部の「タイー族」「ヌン族」の一村を例にー」『アジア研究』46(2):51-86。
- 伊藤正子〔2002〕『エスニシティ「創生」と国民国家ー中越国境地域のタイー族・ヌン族とベトナムー』東京大学大学院総合文化研究科提出博士論文。
- 今井昭夫〔1999〕「文廟」石井米雄監修『ベトナムの事典』東京、同朋社、293頁。
- 岡田宏二〔1993〕『中国華南民族社会史研究』東京、汲古書院。
- 小川博〔1965-67〕「宋代の僂智高の事蹟」『中国大陸古文化研究、1ー4集』1集49-58頁、2集15-25頁、3集27-30頁、4集21-36頁。
- 河原正博〔1959〕「僂智高の叛乱と交趾」『法政史学』12号25-47頁。
- 河原正博〔1975〕「李朝と宋との関係」山本達郎編『ベトナム中国関係史ー曲氏の抬頭から清仏戦争までー』、東京、山川出版社、29-82頁。
- 河原正博〔1984〕『漢民族華南発展史研究』東京、吉川弘文館。
- 菊池秀明〔1998〕『广西移民社会と太平天国〔本文編〕』東京、風響社。
- 瀬川昌久〔1996〕『族譜ー華南漢族の宗族・風水・移住』東京、風響社。
- 塚田誠之〔2000(1)〕『壮族文化史研究ー明代以降を中心としてー』東京、第一書房。
- 塚田誠之〔2000(2)〕『壮族社会史研究ー明清時代を中心として』大阪、国立民族学博物館研究叢書〔3〕。
- 古田元夫〔1991〕『ベトナム共産主義者の民族政策史ー革命の中のエスニシティー』東京、大月書店。
- 牧野巽〔1985〕「雲南の民家族の祖系伝説(1950)」『牧野巽著作集第5巻ー中国の移住伝説広東原住民族考』東京、お茶の水書房。
- 松本光太郎〔1989〕「壮族の移住伝説とエスニシティ」阿部年晴・伊東亜人・萩原眞子編『民族文化の世界(下)社会の統合と動態』東京、小学館。

- 桃木至朗 [2000] 『近世ベトナム王朝にとっての『わが国』』 木村汎, グエン・ズイ・ズン, 古田元夫編『日本・ベトナム関係を学ぶ人のために』 京都, 世界思想社。
- 吉開将人 [2000] 『南越史の研究』 東京大学大学院人文社会系研究科提出博士論文。
- 范宏貴 [1982] 『儂智高』 广西民族学院民族研究室編『壮族歴史人物伝』 南寧, 广西人民出版社。
- 范宏貴 [2000] 『同根生の民族—壮泰各族渊源与文化』 東方文化集成, 東南亜文化編, 北京, 光明日報出版社。
- 范宏貴・顧有識 [1997] 『壮族歴史与文化』 广西与東南亜民族文庫, 南寧, 广西民族出版社。
- 谷口房男・白耀天編著 [1998] 『壮族土官族譜集成』 中国南寧, 广西民族出版社。
- 广西靖西県三套集成領導小組 [1987] 『靖西民間故事集第1集 中国民間故事集成广西卷』。
- 黄現璠 [1957] 『廣西僮族簡史 (初稿)』 南寧, 广西人民出版社。
- 黄現璠, 黄增慶, 張一民編 [1988] 『壮族通史』 南寧, 广西民族出版社。
- 黄臧蘇 [1958] 『廣西僮族歴史和現状』 北京, 民族出版社。
- 覃乃昌・潘其旭主編 [1995] 『壮学論集』 南寧, 广西民族出版社。
- 壮族百科辞典編纂委員會編 [1993] 『壮族百科辞典』 南寧, 广西人民出版社。
- 壮族簡史編写組 [1980] 『壮族簡史』 南寧, 广西人民出版社。
- 張声震主編 [1997] 『壮族通史 上中下卷』 北京, 民族出版社。
- ‘Cac dan toc o Viet Nam’ [1999] *Dan toc va thoi dai*, so 10-11, tr.4.
- Huy Thang & Nong Minh Chau bien soan [1971] *Khu tu tri Viet Bac 1956-1971*, So Van hoa Khu tu tri Viet Bac, 出版地無し。
- La Van Lo & Dang Nghiem Van [1968] *So luoc gioi thieu cac nhom dan toc Tay Nung Thai o Viet Nam*, Ha Noi, NXB Khoa hoc xa hoi.
- So Van hoa va Thong tin Thai Nguyen [2001] *Nui Duom va Duong Tu Minh*.
- Tran Van Giap [1962] ‘Hai bai van bia co co lien quan den Nung-tri Cao moi tim thay o Que-lam (Quang-tay)’ *Nghien Cuu Lich Su*, so 38, tr.51-56, 64.
- Uy ban Nhan dan tinh Lang Son [1999] *Dia chi Lang Son*, Ha Noi, NXB Chinh tri Quoc gia.
- Tinh uy - Uy ban Nhan dan tinh Cao Bang [2000] *Dia chi Cao Bang*, Ha Noi, NXB Chinh tri Quoc gia.

以下は *Nung Tri Cao (Ky yeu hoi thao khoa hoc)* 内より

Dinh Ngoc Hai [1995] ‘Ban ve bao ve va phat huy tac dung di tích Nung Tri Cao

tai Cao Bang', Tỉnh ủy Cao Bang - Viện Sử học Việt Nam, *Nung Tri Cao (Ký yêu hồi thảo khoa học)*, Ban Tuyên giáo tỉnh ủy, Sở Khoa học công nghệ và môi trường, Sở Văn hóa thông tin.

Do Duc Hung [1995] 'Lúc luống quan su trong cuộc nổi dậy của Nung Tri Cao hồi giữa thế kỷ XI'

Nguyen Danh Phiet [1995] 'Nung Tri Cao với vùng đất biên cương phía Bắc của đất nước'.

Nguyen Minh Tuong [1995] 'Thái độ của Nung Tri Cao trong quan hệ với nhà Tống và vương triều Lý'.

Tran Thi Vinh [1995] 'Thời đại Nung Tri Cao'.

Truong Thi Yen [1995] 'Chính sách của nhà Lý đối với các dân tộc thiểu số miền biên viễn và dòng họ Nung Tri Cao'.

Vuong Hung [1995] 'Thái bào Nong Tri Cao (Sử sách, bia miếu, chứng tích và suy nghĩ)'

Central Census Steering Committee [1999] *The 1999 Census of Vietnam at a Glance, Preliminary Results*, Hà Nội, The Gioi Publishers.

Palmer, Katherine Ellyson [1998] *Creating the Zhuang: Ethnic Politics in the People's Republic of China*, Michigan, UMI Dissertation Services.